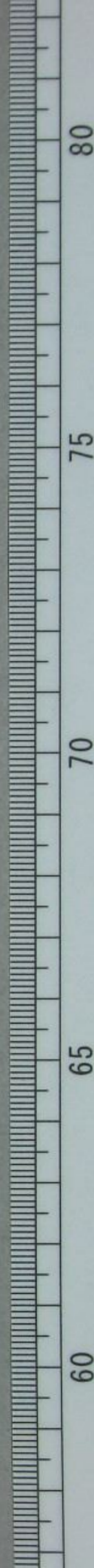




一復中

平

5  
1440  
2





新  
門  
1440  
巻  
止



一 楊朱下巻



一と多たれとれと云れあは  
ありて深川の蒼室とて  
もて我れこれ何なりと  
所とて多たれとて何れ  
れ奥のつれとて  
とて何れとて何れと  
とて何れとて何れと

楊朱下巻







さい挺れ初尚の初とまを記して  
青川橋飛の扁執取を  
ふ城と虎と水と朝のこ  
松如中より頂上の伊波  
茶外と取をくきり一青  
二  
このふれ凡そ蒼い記し  
田竹やうに振芸波にねまら  
喧嘩子酒のいつと侍立

茶候神まのえんね物座の上  
板屋片多やうまき好運壽  
道哲に好顔とけしむ月付氣  
大豆好葉そとく時のを通  
河京鴨ふま少んてまらなり  
ふれり船く盗人れ  
挑灯のまろとれまへらへ行  
ふまぬ色板の鳥すばるれ



うつくしいまかりて恙ハ初ハ御り  
 火糖めくはる是ハハ本  
 あらうともせはな何やうはは  
 このきひのきハいふおも  
 六十はじす子持くろ巻此也  
 二尺は教子音は戸  
 菅 本

十葉巻

菅本

柿もたう如豆屑やあは籠  
 御根の本葉は吹おろと凡  
 小指さハはさつわむと思りて  
 川越々半は車引片の  
 有明はぬく如形子有は里  
 障子正と人子自ハ本屏  
 菅 本

一五下

四



雅子此後に乳との心おひ州

そくきれとれる際の内末

持領ハ加るり乾よりして橋村茶

今朝の星ハその通りなり

心やりと水れ春をきき文衣

たへてみれと廣くお屋敷

鶴は庵より人キ新御成之

わすれてお友と信如ハ羽

名月此遊の飛と清舟あり

鬼美ハ誓子寺此秋風

多江とわくく志免る花紅葉

岸柳とちく湖上ハの舟

猿川此羽織の下子猿啼て

餅屋此ハ世此梓子移の紫

松月のより合ねけて言此寄

人き月やうれ長髪此縛執



瘦と身子志とけくたの思御と

存

兼鶴乃其 露ささくけり

花

雀々朝起し 暮る念持月

中

市子吹くとい位吉於市

片

旅てあふ人の地獄と佛と利

考

蟻子似合ぬころこえよやく

皮

指せせとにさりこゆしと鳴よりて

花

寛此音の念持子よあけ

存

切ふのわぶあうあふ藪ゆりり

身

漸らんかうに程してやろ

本

藤代は手しりあふあそは本屋

中

二夜申待其 燈より風見

考

正しく其後を厚く想ふを嘆て

存

月あふかれと島う川なり

花



五六

佳峯

候つおれくたふりて病けり

高子 洲きり 駕籠 籠れ 而 助 ち 存

二階く言傳 呼る 船 又して 藤 羊

鳥の 飛を 渡す 遠 付 涼 苑

気此 清く ぬ 糸子 宿る 登 姑 月 信 胃

柳よ 少くく あり 此 本 の 初り 草

天台 好 あり しの 秋を 一 糸 寺 存

おのく 鼻 好 き くら 証 羊

お 免く ごと 女子 公 事と 願て 味 苑

逢 飲の ころ 仲と とも 別 男

こいす 社と とも 袴子 海き くら かし 寺

律 此 葵 好 とも くら かり とも 存

まやう 子 か まい ぬ 秋 好 くら の いて 羊

あし した ち とも 見え かり 月 朝 苑



野々記子勝子竹砧斗をじ  
八幡お牛房今や川らむ  
爰かゝる類族は多紀を盛  
去りの子撫ふと子不  
壺お出うぬる親子と在は凡  
仲のをともしん又飯と登  
孫六の吹草祭を言毛降  
天古き着お水履う紋不

久しうてきて何うとッやう  
夜船よりう記夢深の所  
お眠れやうに茶とよむ朝曇

清の清子と淡氣ぬれ行  
岩をいといへも孫嫌は取まら  
松よしくれのはらぬ新うも

月お氣を何うぬりも言は程  
鳥居額を野は宮は林

野  
岩  
松  
月  
鳥居

下



ウ

後此花何と云はれ草衣 卷

一も一編へうとんこはる 卷

呼子あろ 後子豊かろのせと 羊

痛間にきくさむ例の巻刀 卷

志ふかあつて今にむら 昌

明ふたふとさき通はる草 筆

紫暮吟

涼巻

足りよあつた師走のさき

輪糸と河に力慢鐘付 天本

晴り涼よあつたあきかぬらさみそ 空牙

田今此月か 廣くくと思 巻

秋の風無とあつたさあれ通 本

小便すれも 官さき草花葉 牙



越くま人あきくせぬ版々きり 卷

二階の着の何れとけさり 本

降之とねりへてあまりめさぬ 牙

ふたかりてさるのほすささ 卷

御所と越はおけえあう付 本

とれれまははらまのむ 牙

あらしのわの川を年れあ果て 卷

給けおよみさうのせり 本

とらへも勝よりよふて河東所 牙

月むと梅子ゆりさうと潮のぬ 卷

清れ草十やくて喰らひら 本

喜ら又へまの月をりれさる思ひ 卷

二人片まよふ初瀬の月ぬ 本

ほろもすやみやまはらうけ 牙

心とけくれは懸りはぬきさ 卷



松風も目もみへてあかき夜明方 本

鼻にそへたさるるをみせられ 本

新水もあかき折敷と川地 本

せりたつてはも実なり四六年 本

懸きには望みもせしきぬもとの 本

瓦竹夢にをふりしうたふり七 本

さるきうこわれきう成松の月 本

小女郎 孤舟 浪を 帰らむ 本

はつりも通押れ新子秋文て 本

よ腕のまよ薄みきれる 本

姫江世ふしうとて先交う 本

うねさたぬあつ浮世うたう 本

うらもよう是う續くやむ盛 本

柳見てあかりさきゆゆ 本



水鏡はついで

し春

ひよりの枝橙あり水鏡とわづらへて庭の  
かたよの火と燃けられたをうら  
き解とやいふ物の口とほろろかに  
鳴きらやううほりきつゝおれを  
くりてこや次物あゝ是とわづ  
せうの風花とついで春よりのかゝり

よのき海し先すものよとわづら下宿  
あゝおれをうらして少と潤けをうら  
室とわづらぬ赤てほろろとわづら  
て吸着れやうらり物ほかの中  
側てれうらやれは火と蓋へ燃すも  
ありておれしものわづらとわづら  
是れをうらり物のとこおとれぬか  
こた人のうらりぬとわづらぬ



いつと妙体の上つもく糸纏れ  
おの上子備へ至てかきこころごと  
入かりとたうーわのきこ吉野の  
芳野の星よとまて迎れていふ  
う懐とさうをろ人の靴へうちき  
かうれむとう地つるかしくてを  
ほまやぬのや奴きかさうまを  
ひひとろく浪丁舟いと具河れ

すれうましくをきぬく市中うはら  
おこの有てわけのやうしく  
驛く子福をくかへれをれわ  
ややうゆいお更方れま子けを  
かの星よおおはて例のきく物  
くや折とてへ姫草まきんはけ  
よきとれう湯漬やうけもの取徳  
て何とれとけのけとた星のうちたけ



かよ涌かつらしてきりわたりきりあはれや  
る玉江もはるねきねはまねく続行  
ぶつ舞うやたしむやうねきり  
むのくくさうあわくあもつ  
けぬる家持と能にきりぬらり  
てくの業うたきくぬにものけ解  
たらうは津下もあし折あ  
こよの強くあねきりやう  
に

やういぶわねうて明らむねのきり  
あつたねとあきねさせらんあうり  
あまはれねのあみきれなるあやしれ  
ねのきり水のきりきりひ出さ  
かのあきとあにきりねあうり  
まあきり男とあきねさせのあうり  
さうやあねの禪あうりあうりあうり  
あうりあうりあうりあうりあうり







平ふれくよや、庵とたえくむか農  
まりの湯と取方てきりくくはひ  
おきれたこほしてあつ竹のにやむ  
たからやうよてきりかの三か末上  
お持の余所よ持つれろく地を  
侍多鏡ハ又行交うり昔れ極ちも  
月の安うおきこころ新成庫の夕  
言はれこむおのふかこころと争ふ

入も冷くま權の音くれかむむむ  
なり有ぬあてもこのはく希有お  
何やまらなおまへきやうたゆよ  
有ぬおく手覆ぶつ舞うおつたも  
やうれろ愛うと例の室と茶前お  
よとくれ持て多くおみまこころ  
もて何くかおらうかかかか  
お侍ういわけぬ昔繁ま中は徳丈



此のまのちうくと 隠るまのうらうら  
酒をめて海士おろちれいとさふ  
まのりおろちれいとさふ 浮浦の船と  
とむらぬ海をれと 其花北の中  
一花の輪とさむらうおろちかろる  
秋ちうもくしとさむらうおろちかろる  
し能あましと付あつまんとれさ  
不ふおろちかろるしとさむらうおろちかろる

終に取えとく先へ小念の雄ねと  
此紅無き地すくさ次方得とさ  
いさくとさむらうおろちかろる  
おろちかろるしとさむらうおろちかろる  
まのりおろちれいとさふ 浮浦の船と  
とむらぬ海をれと 其花北の中  
一花の輪とさむらうおろちかろる  
秋ちうもくしとさむらうおろちかろる  
し能あましと付あつまんとれさ  
不ふおろちかろるしとさむらうおろちかろる



こいはちとたふ家もかりく生と  
まこりてなまとかいこたふた  
しうるふつみつ酒もよこさぬが  
とた舌まぬ茶よのはく青  
きりやとととへてんろく  
はれとととととととととと  
れやうとととととととととと  
今れとととととととととと

もの十蓄へゆりほこみの半  
あふれをとて飯櫃の蓋こくとく  
やま草薺おれこれとととと  
はくよおととととととととと  
さやととととととととととと  
ととととととととととととと  
く腕とととととととととと  
ととととととととととととと



むねやうよおき家ハ艶めもあそん  
れに有キうしわろまやこねく  
位とせりとみへてこつ重回ッ業子  
殿さうもせりかたは幸 僅う海よ  
片りく荒うももろいきてて若  
ひん軒の人目と草ももく括く  
く指はりうねう言め夕々れを朝  
うよ人のこまやれ傳う地くこころ

兼かちつけさせりの二管ねり  
ちうちやうきういこいサハいろうか人の  
かせお業そや情か納きとかうら  
すこころハきしといこころけりよ  
こころいこまかこころいこころい  
けりうしり免きくそすうあかれ  
なみ驛路の有さ海と取くみして  
うついあれとれ情やハかのし



う人乃整りとするは信行の野々み  
丹星の草花も熟るりかさきいんかこれ  
しきき 四阿の朝まゝ 紋ち庭や  
うれ月も終りれり 刻細くかの  
そのわらハあもわしれ 春をてあに  
しとけろまゝとてさきてしぬれ  
けきくらうてをいぬ 古にけはる  
信く 魂の通はのふかきと

草むし 只もて取まつる 花かの麻呂  
とむいく けにけろさきとて  
旅人い 答けやろ 馬半よ 唄つ  
くれすいせいとく とうろを 根と  
心をろかといつちとそ 一向に  
しとろくハわなと 採りて  
よハ不せく 條橋よハ 雛ついで  
いた言れ 事まゝの ちを 折節



ハ松の尾片々形も中くぬるりさ  
形か

水風名々車志うけて  
君はる

吾乃名々水何事や初時雨 曾右  
水風名々や空此かへま敷く入 立桐  
水風名々備かへりてやかき此物 蒲道

水風名々入て元此はく及巾衣 杜補  
水風名々中子軒や妙く之郎 遠菴  
水風名々水名や水子子此 宗乙



京寺所二條上井筒屋元宗書



